

いろいろなかたちの市民活動



条例で定める活動

団体活動援助

消費者保護



ビッグイシュー さっぽろ

職業能力開発
・雇用機会

経済活動

科学技術

情報化



TWINS



つばみ学校ボカラ
NGOつばみ



むくどりホーム
ふれあいの会



北海道学習障害児・
者親の会 クローバー

市民活動は 20 の分野に分類されています。 札幌で活躍する市民活動団体をご紹介します！

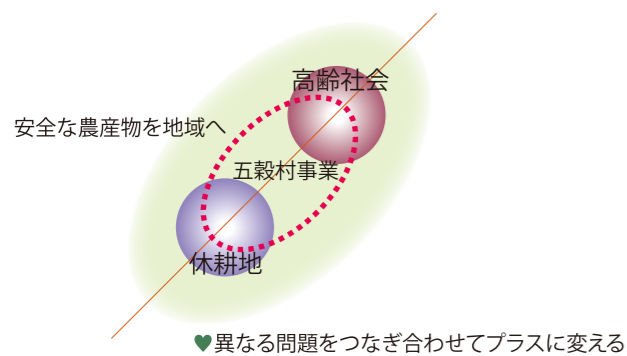
NPO法の20の活動分野は下記の項目です。多くの団体は複数の活動分野を持っています。

- 保健、医療又は福祉の増進を図る活動
- 社会教育の推進を図る活動
- まちづくりの推進を図る活動
- 観光の振興を図る活動
- 農山漁村又は中山間地域の振興を図る活動
- 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動
- 環境の保全を図る活動
- 災害救援活動
- 地域安全活動
- 人権の擁護又は平和の推進を図る活動
- 国際協力の活動
- 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動
- 子どもの健全育成を図る活動
- 情報化社会の発展を図る活動
- 科学技術の振興を図る活動
- 経済活動の活性化を図る活動
- 職業能力の開発又は雇用機会の拡充を支援する活動
- 消費者の保護を図る活動
- 前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動
- 前各号に掲げる活動に準ずる活動として都道府県又は指定都市の条例で定める活動

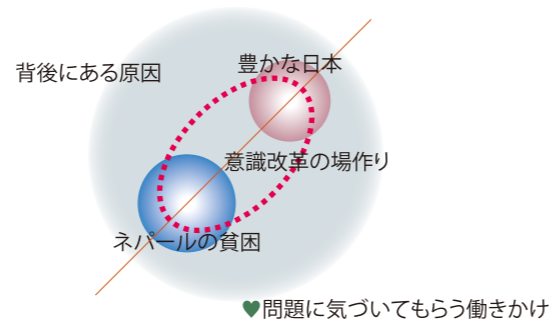
市民活動団体とは？

市民活動団体とは、社会のさまざまな問題を解決するために、自営性、非営利、公益性、情報公開などの考え方で運営される組織をいいます。市民活動団体は、社会のある問題を自分たちの課題として、それを解決するための活動を行います。分業化、専門化が進んだ社会が生み出す、多分野に渡る問題を解決するためには、多角的で柔軟な視点が求められます。

「五穀村(P2)」では、休耕地と高齢社会の問題を組み合わせることで、マイナスの問題をプラスに転換しています。またその成果として、地域住民が安全な農産物の恩恵を受けています。今後、引きこもり青年などの受け入れ事業も展開できれば、さらに複次的な社会への効果が期待されます。



「つぼみ学校(P5)」では、ネパールの学校設立が使命ですが、日ネ交流の場を築き、ネパールの子どもの人権問題を通して、日本や世界の問題を見つめなおす活動もします。学校設立という直接支援と共に、問題の背後にある原因を探る活動により、本質的な解決を目指しています。



以上の事例のように、異なる問題をつなぎ合わせてみる、背後にある原因をさぐり、問題を感じていない人々の意識に働きかける、など様々な活動のかたちがあります。このパンフレットでは、さぼネットのメンバーが、主に札幌市市民活動サポートセンター登録団体から取材した、いろいろなかたちの市民活動団体をご紹介します。活動の実例を通して、どんな問題をどんな方法で解決するのか、社会にどのようなインパクトがあるのか・などを考えるきっかけにしてください。

ひまわり号を走らせる札幌実行委員会

～障がい者を乗せて専用列車を走らせる！



♥実行委員長 岩本萬さん、事務局長 山田敬展さんから伺いました

ひまわり号を走らせる会は、「汽車に乗って旅がしたい!」という障がい者の願いを実現させるために始まりました。全国各地に37もの実行委員会があります。札幌での始まりは、1984年、東京で初めてのひまわり号が走ってから2年後。国鉄労働者の方が札幌で説明会を開催し、参加者から「来年走らせよう」という意見が出たところからだそうです。

実行委員長の岩本さんは895人を乗せた初めてのひまわり号が走り終えたときの事を「消極的な意見や悩んでいた気持ちが一気に喜び

札幌市中央区南5条西11丁目1288番19 コーエイ荘1-6号
TEL/FAX:011-562-2575、090-8270-3476(山田事務局長)
Eメール:yoshinobu1357@ae.auone-net.jp
http://www.geocities.co.jp/himawarigou_sapporo/

に変わった。みんながすごく喜びました。感動的でしたね。」と振り返っていました。事務局長の山田さんは「障がいのある人も一緒に楽しく、安心して生きていけるような社会をつくること。それは人づくりからつながります。」と活動の意義を語ってくれました。このような多くの方の温かい気持ちに支えられ、この活動も2012年で28年目、今年の夏には35本目になるひまわり号が走ります。

ボランティアさん大募集です。障がいのある人と一緒に出かけたいという気持ちをもっている人であればどなたでも参加可能です。また、この活動を支援して下さるという方も募集します。「ひまわり号をささえる会」に1口500円、協賛いただいた方には事業案内や会報をお送りします。ひまわり号が走り続けるための大切な資金源になっています。

♥取材:佐々木香澄

今回事務局会議にも参加させていただき、事務局スタッフの方々の熱いお気持ちと、温かいお気持ちの両方を感じ取りました。事務所にはひまわり号に参加した障がい児・者の笑顔の写真がたくさん飾られていました。写真を見ているだけで、活動の意義を改めて感じました。



ナルク札幌中央・五穀村

～休耕地を有効活用した、シニアによる農業実践の交流活動



♥代表 坂井さんのお話

活動のきっかけは、千歳市郊外駒里地区の農家の方から、自家用野菜の農地と休耕地を「癒しの五穀村」にしたい、との思いを聞いたことでした。都市化によって何かしらの閉塞感を抱いている人々に、農業体験をしてもらい心を癒すという夢に賛同し、ナルク札幌中央の有志たちが、5年前から活動を開始しました。一年目は農地の整備を行い、翌年は有機肥料、無農薬による、じゃがいも、枝豆、大根、いちごなどの栽培と、雑木林の整備、デッキの建設を行いました。今後は栽培面積を1畝広げたり、井戸掘り等の計画もあります。活動5年を経て、農産物を買ってくれる人々も増え、やっとメンバーの持出しが必要ない状況にまでなりました。

千歳市駒里2 2 2 2番地 沼山ファーム内
FAX 011-615-1951 Eメール:n-kagayaki@s2.dion.ne.jp
http://koma5koku.blog10.fc2.com/blog-category-9.html

今後は、「農業体験による癒し」というテーマに沿って、引きこもり青年の受け入れや子どもの農業体験に開放するなどの夢もあります。しかし、限られたメンバーで人員の少ないことが悩みです。メンバーは全員が60歳以上で農業においても素人。地主さんの指導を受け、体力に合った作業に汗を流しています。本来毎日の農作業が必要ですが、人数不足のため週2・3回しか通えません。また、受け入れの企画などを立案できる人材も必要としていて、共に活動してくれる人を募集中です。

注)ナルク札幌中央は坂井さんが代表を務めるNPO法人で、高齢社会に適したまちづくりを進めている。

♥取材:三浦博志

代表の坂井さんから、この活動について折に触れ伺っていましたが、夢を実行に移し形にしていくエネルギーには驚嘆します。札幌圏でもシニア、多世代の交流を目的としたサロンが増えていますが、五穀村の場合は、農業体験という能動的な活動を通して交流を図るところがユニークだと思います。



NPO法人Continue

～やり直しのきく、きちんと失敗できる社会をつくる



♥代表 渡部さんのお話

社会生活が困難だと感じている人たちと、その家族に対しての相談支援や学習支援を通して、誰もが何度でもやり直し、活動し続けることができる居場所づくりや、失敗を温かく見守れる社会づくりを目指している法人です。2012年3月に設立したばかりです。

私は僧侶の仕事しながら、社会生活を円滑に営むことが困難だと感じている人たちが、大変増えていると感じていました。そして、それが引きこもりや鬱、自殺といった深刻な形で表れていることに問題意識を持ちました。そんな時、様々なNPOで活動している人たちとの出会いがあり、「困難を抱える彼らも自発的に活動することで、状況をよりよく変えていける」というヒントを与えられました。その思いつきを実現するため、息子と共にNPO法人を立ち上げ、そして困難を抱え

寺子屋カフェ『cafe_SAVEPOINT』札幌市北区北28西10-1-10
http://npo-continue.org/

る人たちの居場所として、寺子屋カフェ『cafe_SAVEPOINT』を開業しました。自宅の1階を開放したカフェは、飲み物、軽食提供のほか、プロジェクターでの映画会などもみんなで楽しめます。カフェの運営は、利用者たちによる寺子屋会議で意見を出し合い決めていきます。ソフト面ではまだ完成していない場所なので、皆の意見で作り上げていく楽しさがあります。今後は、利用者が主体の講座、講演会、イベントを企画していく予定です。

カフェ開設にあたっては、北海道地域再生推進コンソーシアム主催の、「北海道社会的企業・起業プランコンペ」で助成金を獲得しました。今後の運営資金としては、カフェの売上の他、寺社向けの小物を利用者が制作して販売し、若者の生活費や活動資金の一部に充てていきます。団体の夢・目標は、困難を抱える若者たちがたくさん集まれる場所となり、「やり直しのきく、きちんと失敗できる社会をつくる!」です。

♥取材:喜多洋子

カフェオープンの際にいただいたお汁粉がとてもおいしかったです。コーヒー豆にこだわっていたり、備品も丁寧に厳選していて、親子で一生懸命やっている気持ちが伝わってきました。若者が「自分は自分でいいんだ」という自信をもち、たとえ失敗してもいつだって、いつからだってやり直せる社会になるよう、そしてカフェが若者の心のよりどころになれるようがんばってほしいなと思いました。



小学生カフェ実行委員会

～小学生のまちづくり実践！



あずましバザー出店

♥代表 森口 恵さんのお話

設立のきっかけは、お母さんに連れて行ってもらった麻生にあるコミュニティカフェで、中学生が職業体験をしていた話を聞いたことです。自分たちも地域の大人の人たちと楽しくお話をし、仲よくなれる活動をしたいと思いました。

活動は、昨年9月に「エルプラまつり2011」、11月に「あずましバザー」で、コーヒーやジュースなどを販売しました。売上の50%を震災支援やNPO団体に寄付し、残りの50%を運営資金にしています。2月には、北大カフェプロジェクトが企画した「かまくらカフェ」の運営に参加しました。また、地域でもカフェを出せるよう地域の人たちのニーズ調査や、場所の確保のための調査を行いました。

イベントでは、たくさんのお客さまがきてくれて、コーヒー豆を提供

Eメール: syougakusei.cafe@gmail.com

してくれたり、おいしいコーヒーの淹れ方を教えてもらったりしました。北大生と一緒に参加した「かまくらカフェ」では、北大生のおにいさんやおねえさんと一緒に活動できたのがうれしかったです。

将来は、市内で行われるイベント参加だけでなく、自分たちの住む地域でカフェをひらきたいです。そのために、メンバーを増やしたり、活動場所を探していきたいです。

♥取材: 喜多洋子

私が運営するカフェにきてくれて、自分たちも地域の中で大人と仲よくなれる場所をつくりたいと思ってくれたことが、とてもうれしいです。そして、それを支える大人たちも子どもの主体性を尊重し、子どもの力を信じていることがすてきなと思います。

都市化と核家族化が進んで、地域のコミュニティが崩壊しています。大人は大人、子どもは子どもという集団の中からではなく、大人も子どももいろんな人たちが交流し合うことで、やさしさが生まれ、お互いを思いやる、支え合うところが育つのではないかなと思います。子どもたちのやりたい!を受け止め、大人と子どもが一緒になって、心豊かな地域社会になるよう、がんばっていかなくては!と、小学生カフェの皆さんから教えられ、力をもらいました。



かまくらカフェ

日常生活支援 たすけ愛 きたく・ふくろう

～困ったときは「お互い様♪」地域が支えあう地域づくりを目指します。



ふぁみーる食堂

♥代表: 石田修さんのお話

当団体の発祥は、北区北29条にあるマンションの一階、コミュニティ食堂の「ふぁみーる食堂」と深いつながりがあります。他人事と思えない独居高齢者のひきこもりや孤立死の問題を話題にしたり、食堂の誕生会でのブチ音楽イベント等に取り組むなかで、「地域が地域を見守る活動が必要だ」という想いを同じくした、60歳前後の6人のメンバーにより、2011年5月に任意団体として設立しました。名前は、すでに厚別区で本格始動している「日常生活支援 たすけ愛 ふくろう(代表: 澤出桃姫子さん)」にあやかりました。2011年度中は、構想の検討や本格的な展開の準備で終了しましたが、2012年4月からは本格的

札幌市北区北21条西4丁目2-20
TEL: 011-708-3888 FAX: 011-708-3889
Eメール: kita-fukuroo@cube.ocn.ne.jp

に会員を募集して、「たすけ愛チケット」を通じたしくみを開始します! 厚別区のような軌道に乗るまでには時間が必要ですが、「ふぁみーる食堂」を人々の交流の拠点のひとつとしながら、少しずつ人の輪を広げていきたいです。目下の課題は、「あれもしたいこれもしたい」というアイデアを実行に移すためのNPO設立と、このしくみと活動をどう発信すれば、地域の人々に理解され、支持してもらえるかということです。この活動をすすめるながら、既存概念をうちやぶり、人と人とのつながり方やボランティア観をも変え、安心して暮らせる地域づくりに貢献することを夢んでいます。

♥取材: 滝口香織

本業の建築士のお仕事の傍ら、町内会の役員もされ、地域とのさまざまなネットワークをお持ちの石田さん。並行して、地域と地域の企業を結ぶNPOの設立も準備されていて、多層的な地域支援の構想を描いていらっしゃいます。朗らかなお人柄とあいまって、今後の北区のキーパーソンになられる方とお見受けしました。



企画会議

世界先住民族ネットワーク A I N U

～世界や市民とつながり、権利の実現へ



先住民族サミット

♥札幌事務局・島崎直美さんから伺いました

アイヌ民族の有志が草の根で準備し、成功を収めた「世界先住民族サミット・アイヌモシリ2008」の終了後、その実行委員会が母体となって設立しました。世界各地の先住民族とつながりながら、「先住民族の権利に関する国連宣言」に沿った権利保障を実現していくことを主な目的としています。

具体的な活動としては、専門家やアイヌ民族自身を講師とした学習会の開催(年3～6回)、国際会議や訪問団への参加を通じた、世界の先住民族とのネットワークづくりなどを行なっています。2010年には、名古屋で開催された生物多様性条約COP10会議に合わせて第二回目の「先住民族サミット」を開催、先住民族の視点から生物多様

TWINS

～安心な道産野菜を被災地の子どもたちに



企画会議

♥代表 大貫瑞穂さんから伺いました

昨年9月、職業訓練校に通う仲間3名の帰り道のおしゃべりからできた会で、現在NPO法人の申請中です。代表の大貫瑞穂さんは福島県から娘さんと避難してきたママさんで、江別の野菜直売所から実家に送った野菜が、おいしく、放射能の影響のない安全なもので、大変喜ばれたという体験があります。子どもを持つお母さんや子どもたちが、安心して食べられ、心や体にかかるストレスが少しでも減ればと考え、道内産の野菜を送ろうと、現在、農家や流通、受け手などの販路作りを模索中です。近くに住む福島出身者は依頼を受けて、小規模では野菜を

TEL/FAX: 011-593-0655
Eメール: naomi1959@jcom.home.ne.jp
http://www.win-ainu.com/

性について提言しました。

現在、会員は約130名で、うち50名程度がアイヌ民族。活動の成果としては、アイヌを自ら表現するアイヌが増えたこと、アイヌとつながるシサム(和人)が増えたこと、があげられました。

今後は、人材育成、とりわけアイヌの若い世代の育成に力を入れていきたいとのことで、海外の先住民族との交換プログラムなども考えているようです。現在、NPO法人化も検討中。市民参加型のネットワークなので、「アイヌ民族への意見やアイデア、大歓迎!」とのことです。

最後に一言、「2012年6月9日に第5回マウコピリカ音楽祭をエルプラザにて行ないます。ぜひご参加ください!」

♥取材: 小泉雅弘

歴史的・構造的な差別にがんじがらめにされてきたアイヌ民族のエンパワメントと復権は、これからの北海道、そして日本社会にとっての大きな課題ですが、周囲の市民の関心はまだ大きくありません。身近なところで市民に開かれた活動をしているアイヌ民族を応援しましょう!



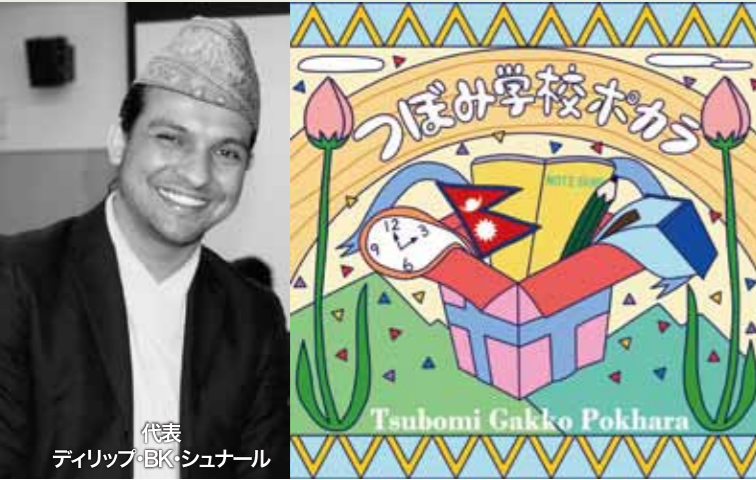
札幌市厚別区厚別西4条2丁目6-19
TEL: 070-6605-4715(大貫)
Eメール: divine-design@ktf.biglobe.ne.jp

送っているようですが、さらに販路を拡大して放射能被害のあるところならどこにでも、定期的に送りたいと意欲的です。福島近県では野菜の選択には余地が少ないので、それを広げる意味もあり、長い目で見た子どもの健康支援につながる活動だと思えます。ホームページやパンフレットもこれから作成します。TWINSの趣旨に賛同して、一緒に活動してくれる仲間を大募集中です!

♥取材: 吉田三千代

昨年秋から、仲良し3人でエルプラザの相談窓口にも熱心に通ってきてくれています。私自身が福島に野菜を送った体験から、農家や人の紹介などをしてきました。この2月にも福島を訪問しましたが、「福島県応援コーナー」には農家さんの写真付きで野菜が並び、「買い支え」も必要なかなと思ってしまう空気があります。子どもたちの健康のために大きく育ててほしいと思えます。





♥代表 ディリップ・BK・シュナールさんのお話

当団体は、2005年に私の妹がネパールでストリートチルドレンに基本的な教育を授ける、小さな施設をつくったことから始まります。ちょうどその頃、私はアメリカの大学を卒業し、日本で新生活を始め、日本や世界各国の友人に向けて、ネパールでの活動への支援を呼びかけるようになりました。その甲斐あって、2010年にネパール政府より土地を与えられ、私の故郷ポカラに50人規模の学校を設立することができました。しかし、これはほんのスタート地点に過ぎません。ネパールには何万人ものストリートチルドレンがいるのですから。このような子どもたちへの学校を、ネパール全土に設立していくことが当団体の使命です。

むくどりホーム・ふれあいの会

～だれでも立ち寄れる、心のバリアフリーに満ちた場所づくり



むくどり公園の雪遊び

♥会長 柴川明子さんから伺いました

1996年に地域の人たちと札幌市の協力で、藤野むくどり公園ができました。視覚障がいや車いすの子どもが遊べる工夫をしたユニークなものです。公園の向かいの柴川明子さん(むくどりホーム・ふれあいの会会長)宅を開放して、むくどりホームが誕生しました。一般住宅をバリアフリーに改造したもので「障がいのある人もない人も、赤ちゃんからお年寄りまで、だれもが気軽に立ち寄ることのできるふれあいの場」をモットーに、週3回(月、火、土)ふれあいの会を開催しています。これまでミニコンサートや手芸教室、季節のイベントなどを続けてきました。小学生として参加した人が、今はボランティアになったり、町内会

さらに私は、より活動の幅を広げるために、2011年に札幌で改めて「NGOつぼみ学校ポカラ」を設立しました。私が重きをおきたいのは、ネパールの惨状を訴えて支援を募ることよりも、むしろ日本の人々が興味と情熱をもって参加する、創造性に満ちた交流の場を築くことです。その際に、インターネットを介したソーシャル・メディアが非常に有効です。長い在住生活を経て日本が大好きになりましたが、日本社会の問題点も肌身で感じ、日本の将来を案じています。私の活動により、日本の人々の自己表現や意識改革のきっかけを提供し、国内や世界に発信力を持った人々を送り出したい。それが、日本や世界を救い、ひいてはネパールを救うことだと信じています。

♥取材:滝口香織

当方の英語講座でほぼ毎週お会いしていますが、ネパールとは一見関係のない国際イベントに力を注がれていた真意をこのたび理解し、驚愕しました。自らを「社会運動家」と位置づけ、Love, Peace, Unityをキーワードに地球規模の夢を描き、独創的な考え方・スタイルで活動されている姿がまぶしく映りました。



札幌市南区藤野2条1丁目13-10
 TEL/FAX: 591-7035
 http://www.geocities.jp/mukudori1995/index.htm

の協力でイベントを開いたり、地域に根付いた「みんなの居場所」になっています。

雪遊びの日には、スノーキャンドルや滑り台を公園に作って遊んでおり、障がい児も震災や放射能から逃れて来ている親子も、自然に溶け込んでいます。学び合いが自然な形で行える、笑顔がいっぱいの素敵な場所です。

♥取材:吉田三千代

15年くらい前、できたばかりの公園やホームを障がい児と利用したことがありました。視覚障がいの方に配慮した、ハーブの香りが満ちた公園は、誰にでもやさしい雰囲気でした。久しぶりに伺いましたが、「誰でもきてね」というメッセージがオーラのように出ていました。それをキャッチした、他県から避難してきている方もまざっていて、やはりとてもすてきな場所でした。



農業就労体験

♥団体役員 大井さん、礎さんのお話

クローバーは、学習障害を持つ子どもの親たちにより1987年に設立されました。7年前「発達障害者支援法」ができました。しかし、子ども達はその制度に乗り切れておらず、将来的な支援体制が見えません。そこで、クローバーでは、親たちに保護の限界が来ても子どもたちが困らないよう、10年後を見据えた事業を始めました。これまでは母親たちの活動がメインでしたが、この長期計画の作成に当たっては、父親たちの活躍が大きく、父、母双方の視点の必要性を実感しました。

この事業の運営は、団体会員と外部専門家(教育、医療、福祉、農家)との協働で行っています。事業の三本柱の一つ目は、「家族支援」で、

ビッグイシューさっぽろ

～路上生活からの脱出を応援する



地下歩行空間の販売ブース

♥代表・平田なぎささんのお話

ビッグイシューは、イギリス発祥のホームレスの自立を支援する雑誌。日本版の販売は大阪でスタートし、札幌では2007年に、夜回りなどのホームレス支援活動をしている「北海道の労働と福祉を考える会」の中から販売をサポートする活動が始まりました。2012年2月現在、5名が販売員として街頭に立っています。これまで12月～3月までの冬期間のみ地下でブース販売を許可されていましたが、地下歩行空間ができ地上歩行者が減少したため、今年度より案内所兼販売ブースを地下歩行空間に通年で持てるようになりました。活動の成果として、継続できた販売者は全員アパートに入ることができています。ただ、部屋は持っても、ホームレス経験者に仕事はなかなか見つからないのが実情

親たちが障害をより理解するためのものです。二つ目は子ども達を対象とした「自立支援」で、一人ぐらしのできるための学習や、孤立しないためのセーフティネット(尋ねられる場所、助けてもらえる場所)の学習などを行います。三つ目は「就労支援」で、農業就労体験を行っています。事業2年目ですが、自立支援としての料理教室では、買出しや他の人達の分の料理も作れるようになるなど、大きな成果を挙げています。2年間、トヨタ財団の助成で運営してきましたが、今年からは寄付集めなどの資金獲得も課題となってきます。

10年後の到達目標は、子どもが一人になっても引きこもらず、集い笑える場所を持っていることです。長期計画のため多くの見直し予想されます。しかし各々の子どもの個性に合った場所を作り、つなげるために目標を見失わずに活動していきます。

♥取材:三浦博志

多くのNPOは、具体的な長期計画を持っていないのが現状です。資金的、組織的に展望を持ちにくいことが要因と思われます。クローバーの場合、家族の切実な問題を解決するためには、長期の具体的な計画が必要でした。

抽象的な目的に陥りがちで、成果を評価しにくい多くのNPOにとって、学ぶべきところが大変多い事例だと思います。

TEL:080-4040-1914
 Eメール:big.issue.sapporo@gmail.com
 http://bisapporo.web.fc2.com/

です。ボランティア・スタッフの主な活動は、当番制で雑誌の卸し作業、在庫の管理・発注、広報、販売者の居宅支援など。会員制にはしておらず、20名ほどがメーリングリストで連絡を取り合っています。雑誌に折り込まれたチラシをみて「販売者を応援したい」という素朴な気持ちから関わっている人が多いのですが、販売者との関わりや活動の中で、背景にある様々な問題に気づかれるようです。

他の支援団体との話し合いでよく話題になるのは、生活保護へのスティグマ。行政担当者の対応の問題もあり、生活困難な人もなかなか生活保護を申請しがりません。一方で路上生活からの脱出をサポートしても、新たに路上生活に転落する人が後を絶ちません。年越し派遣村が話題になった頃には人々の関心も貧困問題に向かいましたが、ブームが去り、支援団体の運営も厳しくなっています。問題自体が解決しているわけではないので、もう一度、貧困問題に目を向けてほしいのです。最後に一言、「ビッグイシューは内容も充実しており、本屋では手に入らない雑誌なので、まずは一度、手にとって読んでください!」

♥取材:小泉雅弘

現在は任意のボランティア・グループですが、活動の継続のために法人化も検討しているそうです。有給スタッフの必要性も感じており、人件費に当てられない助成金への疑問も話していました。

